

# いっしょに 頑張ります。

## わだいのじかん

— 103 —

### 市民共同発電

先日、市民共同発電に関する講演会に参加し、面白い言葉に出会い共感しました。「電気の引き売り」という言葉です。発言したのは、和歌山県での市民共同発電の先駆けである南紀自然エネルギーの安原さん。

市民共同発電は、市民が共同出資し、地域の自然資源による環境に配慮したエネルギー発電を行い、売電益を地域づくりに活用しようという取り組みです。

一方、引き売りとは路上での移動販売のことで、昔、天秤棒を担ぎ独特の呼び声やラッパなど鳴り物入

りで食品や日用品を売り歩いたことに原形があります。納豆売り、豆腐売り、金魚売りなどは昭和の懐かしい趣があります。歌を流し馬車(後に自動車)でパンを売る「ロバのパン屋さん」もありました。近年でも「さおやーさおだけー」などの物干しさおの売り声(音声)はなじみのあるところでは、ラーメン屋さんの屋台も引き売りに入りま

市民が共同で行う発電事業と昔ながらの引き売りに共通点があります。串本が拠点の南紀自然エネルギーは、発電益を町内の子育て支援や商店街活性化

## 電気の引き売り



農産物直売所

化、お年寄りのサポート、串本のサンゴの海を守る活動支援などまちづくりに還元する仕組みです。また、紀の川農協のように、配当として地域の農産物や産品を届けることで地域農業を応援しようという市民共同発電もあります。

収益が約束されている発電事業では、資金は銀行で借り入れた方が手取り早い。なぜわざわざ市民出資を募る手間をかけるのでしょうか。

市民共同発電は、市民自らが地域の将来を作っていくプロセスそのものです。出資とはこのプロセスに参加し地域づくりの当事者になることに他なりません。

銀行に大金を借り、はい発電しました、と効率的に発電規模や収益を重視する取り組みとは目的が違います。

高度に発展した社会システムはその形成過程で、人と自然資源、人と人との直接的な関係を非効率の名のもとに排除してきました。

現在、「自然資源の観光活用」が注目されていますが、これは資源の効率的利用です。本来的な関係性は、その地に暮らす人間の日常や生存に結びつき効率とは無縁の緩やかな営みの中にあつた。非効率だからこそ維持、管理、運営の

### 食と電気は似ている

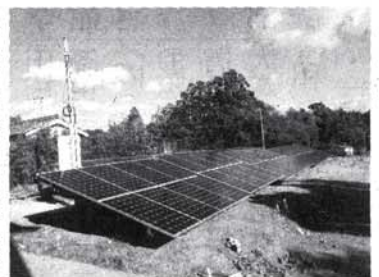
非効率な関係性の取り戻しは、食の安全性を求めた市民活動の系譜と似ています。

人気の農産物直売所もルーツは引き売りです。畑の野菜や果物を売り歩くことから、朝市や小さな直売活動など農家の自発的な販売活動へと進み、消費者も虫食いだらけの無農薬野菜を共同購入しながら産直生産農家を支えてきました。こうして安心安全志向した有機農産物や産直活動は広く認知されていったのです。この間約30年の時が必要でした。

引き売りとは、人が運ぶことができるだけの少量の商品

ための仕事があり地場技術が発展しました。効率を追及すると先端的なスキルを持った大企業に頼らざるを得ず、地域の仕事は衰退します。

市民共同発電は、人間と自然、環境、人との直接的で非効率な関係性をあえて取り戻そうとしているといえます。



南紀自然エネルギー発電所

い、売り手と買い手が直接相対する関係、そこで成立する商売の基本は「信頼」です。「電気の引き売り」にもこの3点が共通するのです。

食とエネルギーは生存の根源と人間たる社会生活を守り維持するインフラです。安心できる命のインフラを残したい、半減期が数万年という核燃料に命を預けることへの本能的な恐れが市民発の「下からの」行動の原動力といえます。

「安全な電気ありませんか?」この安全の意味はすくなく大きい。数千年の瑕疵(かし)を後世に残さない、安全なのです。

湯崎真梨子(ゆざき まりこ)

和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授

専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。

# プロフィール

